

脳梗塞（脳血栓と脳塞栓）

脳梗塞（脳組織に血液が到達しないため、脳細胞が障害ないし壊死をおこし、症状を発現するもの）は、脳動脈硬化（血管の狭窄）に由来するアテローム性脳血栓症と、心臓内血栓や脂肪塞栓などが血管を閉塞し、脳梗塞をきたす脳塞栓症および脳深部に小さな脳梗塞をきたすラクナ型脳梗塞に分類される。

アテローム性脳梗塞症になりやすい体質は、高血圧、糖尿病、高脂血症（コレステロールおよび中性脂肪の増加）、喫煙、高尿酸血症である。心臓内の血栓は、心房細動などの不整脈を有する場合、また最近では、エコノミー症候群も有名である。脂肪塞栓は、骨折などの際に起こる場合がある（Crush症候群）。

ラクナ型脳梗塞は、脳血管性痴呆に関連するもので、前頭葉に小さな脳梗塞を多発するものであるが、高血圧のひとに起こり易い。脳梗塞の主な症状は、急に口が聞けなくなった、半身の手足が急に動かなくなった、しびれた、急にめまいがして、たっていない、視野の半分にカーテンがかかったような感じになる、などの症状である。

症状はゆっくりと進行する場合と、急に発症する場合がある。危険因子の発見よび治療が必要であるが、特に、危険因子を有する人は、MRAによる脳内血管の狭窄の程度および、頸動脈エコーによる頸動脈の狭窄の程度を確認する必要がある。その結果、脳梗塞の予防薬（抗血小板剤や抗凝固剤）の服用が必要である。

